

〈原著論文〉

イソクラテス『ブシリス』における修辭的装置としてのアルキビアデス

中村寿々葉

東京大学（帝京科学大学 非常勤講師）

Alcibiades as Rhetorical Devices in Isocrates' Busiris

Suzuha NAKAMURA

The University of Tokyo (Teikyo University of Science)

Abstract

Isocrates is aware that in addressing Busiris as the object of his eulogy and defence, a negative reference to the existence of Alcibiades could legitimise Polycrates' accusation of Socrates. It is not appropriate to mention Alcibiades with the intention of condemning Socrates, because Alcibiades is also a man with aspects of excellence. A parallel in this respect is the way in which he praises Busiris. Therefore, in order not to compromise the quality of his own speech of praise, Isocrates ensured that in his praise of Busiris he focused only on the elements of his excellence. He offers the rule of concealing any negative opinions in the context of praise and, in defence, of providing the necessary rebuttal or counter-argument after revealing the matter of blame or accusation. In dealing with praise and condemnation, Isocrates tends to focus on the elements necessary for praise and to make a clear distinction from apologetics. He therefore treats Busiris according to the principles of proper praxis and tries to resolve the paradox of Busiris in the context of praise, without getting bogged down in accusations against Alcibiades. Alcibiades is considered to be a signifier to distinguish between praise and apologetic protocols and not to lose sight of the purpose of praise.

キーワード：称賛弁論、アルキビアデス、ギリシア神話、神話叙述、歴史叙述

Keywords: encomium, Alcibiades, Greek mythology, mythography, historiography

はじめに

修辭家イソクラテス（前436-338年）の法廷弁論作品（16-21）の解説書を著したWhiteheadは、ほとんどの場合にイソクラテスがリュシアスに比べて劣ると見なされることや、作品ごとに吟味して評価するよりも特定の情報を抽出するための資料とされる傾向が非常に強いことを指摘している¹⁾。

事実、Tooの著作が出版されるまでの間、イソクラテスを主題としたモノグラフは見当たらない*¹⁾。Tooの研究は、これまで修辭学と哲学において、また歴史においても、周縁的な存在とされてきたイソクラテスの権威を回復させることが目的であると宣言しているが²⁾、あえて古代の証言よりも現代の学者と理論を優先しており、この試みは挑戦的ではあるが、歴史的視点に乏しいともいえる。

近年の研究では、Viidebaumを高く評価すべきであろう。Viidebaumは、前4世紀のプラトンから前1世紀のディオニュシウスに至るまでの修辭学の形成を分析し、古代の修辭学が従来考えられていたよりも複雑で多様な性質を持っていた可能性を示唆し

ている³⁾。つまり修辭学の伝統は、単一の個人や学派による影響だけでなく、哲学者や修辭学者など様々な要素からの影響を受け入れて成り立っていた可能性を考える必要がある。「古代の修辭学」と一口に言っても、異なる時代や文化において、多様な発展が生じた可能性が高い。

そこで本稿では、未だ作品理解の進んでいない『ブシリス』に焦点を当て、イソクラテスが他の作家と自身を対比させるなかで、どのように修辭の手本を実演しているかを示し、イソクラテス的な修辭のアプローチに説明を与えたい。

問題の所在

イソクラテスの『ブシリス』が書かれた時期について、確実なことは何もわかっていない。イソクラテスの学校が開かれた後の紀元前388-384年、またはプラトン（前429-347年?）の『国家』との関連から前370年代という見解が一般に受け入れられている⁴⁾。

『ブシリス』は、2001年にLivingstoneの解説書

が出版されるまで、現代の研究者からほとんど無視されてきたと言ってよい。この作品はイソクラテスから修辞家ポリュクラテス（前440-370年？）への書簡という体裁ではあるが、エジプトの伝説上の王ブシリスへの賛辞が中心となっている。同時に、イソクラテスがこの「書簡」を通じて目的とするのは、ポリュクラテスへの教育であると宣言されている*²。この作品全体を理解するうえで問題となるのは、アテナイの将軍で政治家のアルキビアデス（前450-404年）の存在であろう。

作品の冒頭で、イソクラテスは次のように述べる。

あなたが『ブシリスの弁明』と『ソクラテスの告発』を少なからず自慢しているのを私は知っているが、どちらの論説においても、あなたはこの主題が必要としていることから大きく逸脱していることを、私はあなたのために明らかにしようと思う。というのも、誰もが知っていることだが、ある人を称賛しようとする者は、実際に持っているよりも多くの徳をその人に与えなければならない、ある人を告発しようとする者は、これの逆をしなければならない。

あなたはブシリスを弁護すると公言しながら、修辞の原則に従わず、現状の非難から彼を解放することなく、むしろ、これ以上に考えられないようなもっとひどい罪を彼に付け加えた。というのも、彼を中傷することを企てた他の者たちは、辿り着いたよそ者を犠牲に捧げたことについて非難しただけだが、あなたは彼がその人間を食べたと非難した。また、あなたはソクラテスの告発を目的としながら、あたかも称賛することを望むかのように、教えを受けたとは知られていないアルキビアデスを、彼に弟子として与えた。しかし、アルキビアデスがギリシア人たちを凌駕することは、全ての人が認めるところだ。

したがって、もし死者が語られたことについて判断する力を得たら、ソクラテスは彼を称賛してきた者たちに対するのと同じように、あなたのこの告発に感謝するだろう。一方のブシリスは、もし他者に対してきわめて親切な人物であったとしても、あなたのその言説には、いかなる復讐をも辞さないほどに激怒するだろう。自分が称賛した人よりもむしろ中傷した人に愛

される者は、誇りよりもむしろ恥を感じるべきではないだろうか。

イソクラテス『ブシリス』46⁵⁻⁶⁾

このように、イソクラテスは称賛と弁明の取るべき常道について指摘したあと、ブシリスの伝承を取り上げて称賛の手本を演示してみせる。ブシリス賛美への導入となるこの箇所而言及されたアルキビアデスについて、Livingstoneは次のように驚きを示す⁴⁾。

because Alcibiades, and any educator would wish to have famous and influential pupils. Isocrates had composed praise of Alcibiades in the speech *On the Yoke*, but even so it is surprising that in *Busiris* he could so confidently dismiss the idea that association with him was discreditable.

つまり、ソクラテス（前469-399年）の信用を失墜させるためではなく、むしろ名声を高める効果を狙ってアルキビアデスに言及することへの違和感を表明している*³。

Viidebaumもまた、この箇所が印象的であることを指摘し、イソクラテスがソクラテスとその影響を受けた信奉者や学派へ対立する立場にあることを示すためのものだという³⁾。

It is striking that Isocrates' criticism of Polycrates revolved around the figure of Alcibiades: Isocrates claims that Polycrates has falsely given the ever-talented Alcibiades to be a student of Socrates. Most Socratic philosophers thought long and hard about how to distance Alcibiades from Socrates and how best to address the claim that Socrates was responsible for the damage that Alcibiades inflicted on Athens. Isocrates instead embraces the excellence of Alcibiades and claims that Socrates was never his teacher in the first place, thus effectively belittling the influence Socrates as a teacher had on Athenian politics.³¹ Isocrates' claim might be best understood as a twist on the paradoxical subject itself, but either way it is hardly supportive of Socrates as a venerated teacher

and role model.

イソクラテスが指摘するポリュクラテスの誤りとは、称賛と弁明の区別がついていないことにある。告発対象であるはずのソクラテスの弟子としてアルキビアデスを数え入れるということは、アルキビアデスほどの傑出した公人を育てた教師ソクラテスを称賛することにつながり、これでは告発としておかしいという。

もし、ここに何らかの価値の転倒があるとすれば、つまりアルキビアデスがソクラテスの評判を落とすだけの存在であるなら、この言及はイソクラテス自身に、また作品を構成するうえで危険な形で跳ね返ってくる。アルキビアデスを称賛すること自体の危険だけでなく、イソクラテスが逆説の証明に加担し、哲学の立場をさらに窮地に追いやることになる。

実際、このことも明らかだ。すでに危機的状況に瀕し、憎まれている哲学を、そのような演説によって、人々はさらに嫌悪するだろう。したがって、もしあなたが私に耳を傾けるのであれば、このように取るに足らない話題を扱うことはもうないでしょう。しかし、それができないのなら、あなたは自分の評判を傷つけず、模倣する者たちを墮落させず、言論教育を毀損しないようなことについて話すよう努めるべきだ。

『ブシリス』 49

『ブシリス』の終わりに、言論の教育に携わる教師のあるべき姿についてイソクラテスはあらためて言及している。この姿勢からは、ソフィスト的な逆説的証明に挑もうとしているとは考えられない^{*4}。イソクラテスがアルキビアデスを取り上げるのは、称賛の原則を他の教師に示すことを目的とした『ブシリス』を構成するうえで効果的な賛美への導入となることを、以下で示していきたい。

ブシリスの賛美と弁明

ポリュクラテスの名は後世の修辭学者にもよく知られているが、彼自身とその作品についてはほとんど知ることができない^{4,7)}。ポリュクラテスの『ブシリスの弁明』も『ソクラテスの告発』も現存しない。この二作のほかに、クリュタイムネストラへの賛辞、英雄として称賛するにはふさわしくない人物（おそらくテルシテス）への賛辞が知られており、彼が逆説的な不条理な主題を扱うことを得意としたことが

うかがえる^{*5}。

このような文脈をふまえると、一般にブシリスは非難されるべき人物と見なされており、覆すことが難しいイメージに挑戦しようとするのが『ブシリスの弁明』ということになる^{*6}。一方で『ソクラテスの告発』は、実際の告発者や裁判員に共感したというよりも、むしろソクラテスを賛美されるべき人物として捉えており、そのような哲学者を告発するという困難な主題に挑戦しようとしたと推測するのが妥当である。

イソクラテスがポリュクラテスの形式上の誤りとして指摘するのは、『ブシリスの弁明』でブシリスの系譜にふれずに賛美していること、ブシリスがさらなる罪を課せられて非難されていること、また『ソクラテスへの告発』でソクラテスの賛美を目的としているかのようにアルキビアデスを取り上げたことである。そして本来は区別されるべき「賛美」と「弁明」の演説をそれぞれどのようにおこなうべきだったかを、ブシリスを主題にしてイソクラテスが教示すると宣言されている。

しかし、ἐγκώμιον（賛美）、ἐπαινος（称賛）とἀπολογία（弁明）の区別は自明とされるばかりで、イソクラテスは詳細な定義を示すわけではなく、イソクラテスの作品内部でおこなわれた実践から理解するしか手立てがない。イソクラテスの演示的な作品には、ある事柄についての「他者における扱い」と「自身における扱い」を対比させ、物事がどうあるべきかを論じていく構造を持つものが多い^{*7}。この特徴を軸にしていくことが肝要となる。

また、イソクラテスが重視するこの形式の区別は、彼の『ヘレネ頌』にも取り上げられている。レオンティノイの弁論家ゴルギアス（前485-380年）がヘレネを主題に選んだことは素晴らしいとしつつ、しかし形式上の誤りがあるために賛美ではなく弁明になっていることをイソクラテスは批判している^{*8}。

ゴルギアスの『ヘレネ頌』が称賛の意図を持って書かれていることは、21節で確かに明言されている^{4,8)}。しかし同時に、彼女が不当に負わされているトロイア戦争の責任について論駁するとも述べている^{*9}。実際、6-19節ではヘレネが免責されるべき4つの要因を挙げている。これは確かに法廷弁論における弁護の典型である⁸⁾。

イソクラテスは、賛美する対象の優れた系譜から述べることを求めている。当然ながら、ブシリスの賛美は11節で彼の系譜についてふれることから始めており、ほかにも『ヘレネ頌』では16節、『エウア

グラス』では12-14節で、やはり賛美対象の生まれの高貴さから語り始めている。この系譜の要素は、ゴルギアスの『ヘレネ頌』3-4節にも見られる。要素の観点に立てば、ゴルギアスの『ヘレネ頌』は賛美を含んでもいる演説ということになる。しかしポリュクラテスの場合には、彼が系譜を得意としながらブシリスの系譜へ言及しなかったことが批判されている(8)*¹⁰。

系譜に次いで、ブシリスが築いた王国エジプトについてイソクラテスは語り始める。ブシリスがナイルによって守られ優れた耕作能力を持つエジプトを獲得し、民のために十分な食糧を確保したこと(11-14)、階級制度によってそれぞれが自分の持分を維持できる統治を行っていること(15-20)、また医学や天文学、幾何学といった学問の発展の土台を築き励行し(21-23)、宗教儀礼に関する法を定め、それを通じて敬神の心を植え付けたとされ(24-27)、そしてエジプトから学んで哲学をギリシアに持ち帰ったピュタゴラス(前570-490年?)はその敬虔さの証人であるとしている(28-29)。

ここで挙げられる優れた性質はエジプトという国を称賛するにふさわしいものだが、そのエジプトという王国自体がブシリスの「自身の卓越性の記念碑(10)」であり、エジプトの卓越性に対応する徳が建国者のブシリスにも備わっていたことを推論させる*¹¹。『ヘレネ頌』においても、ヘレネの美(徳目の一つ)がテセウスほどの傑出した人物を征服するものであり、テセウスによって保証されることが断言されている(18-22)。

この11-29節のブシリスへの賛美において、イソクラテスはブシリスを称賛することに徹し、否定的な意見や悪評、まして食人の罪には一切ふれていない^{4, 9)}。イソクラテスはポリュクラテスの伝承を捨てて、ブシリスを肯定する評価のみを取り上げている*¹²。この姿勢はやはり『ヘレネ頌』においても徹底されている。

イソクラテスによる弁明は、たとえそれが不当なものであっても、弁護される人物や事物に関する否定的な意見が先に存在することを必然的に認めたいうえでおこなわれる。一方の賛美は、その対象に対する称賛のコンセンサスを前提として、それを高める目的を遂行している。

30-43節にかけておこなわれるブシリスの弁明においては、ブシリスがその凶行に及ぶには、年代の考証からも人物像からも不適格であることが反証の根拠となっている。ブシリスが外国人殺害ののちへ

ラクレスによって落命したとする説は、ブシリスとヘラクレスの世代の違いから到底ありえないのである。ブシリスの生まれは賛美のなかで先に示されているように、母はエパボス、祖母はイオである。一方のヘラクレスはペルセウスとダナエの子である。イオからヘラクレスまでは十三世代、イオからペルセウスの曾祖父まで六世代離れている。ブシリスはペルセウスよりも二百歳以上年上の人物ということから、ブシリスの殺人とそれに対するヘラクレスによる退治は起きようもなかったとされる(36-37)。

人物像についても、先に示された賛美によって明かされたように、神々から生まれ様々な功績をもつ偉大な人物が、最も不敬な人間から生まれた者たちにも劣る非道なおこないに及ぶわけがないとされる(38-43)。イソクラテスはさらにブシリスの賛美も弁明も続けることはできるが、手本を示すという目的は果たせたと述べる(44-45)。

アルキビアデスの賛美と弁明

さて、イソクラテスがアルキビアデスを取り上げるのは『ブシリス』に限らない*¹³。『競技戦車の四頭馬について』は、アルキビアデスの嫡子アルキビアデスがケファロス出身の政治家テイシアスに起こされた訴訟に関わる法廷弁論だが*¹⁴、多くの作品とは構成が異なり、25-35節にかけて長い賛美が挟まれている。本弁論が父アルキビアデスの称賛をおこなうには理由があり、訴訟相手の弁論が供述書というよりも父アルキビアデスの中傷に多くを費やしたため*¹⁵、やむをえず弁明をおこなうことが避けられないと説明されている(2-3)。

この訴訟の結末はわからない。しかし、この賛美が裁定をくだす裁判員(ディカスタイ)にどのような影響を与えうるか検討したとき、法廷でこれを披露することを危険と見なし、この作品がこのまま法廷で使用されたことを否定する根拠にされることすらある¹⁾。

25-35節にかけて行われた賛美のうち、アルキビアデスの賛美の中心は、オリュンピアの競技大会に戦車競技7台を走らせ、一等、二等、三等を独占したことである。あわせて生まれの高貴さや、典礼における費用を惜しみなく負担したこと、そのほか公共奉仕に多額の財を投じたことを挙げている。

この事実はアルキビアデスの存命時からかなり有名な出来事であり、トゥキュディデス(前460-400年?)の『歴史』にも報告されている*¹⁶。アルキビアデス本人によるこの報告は、シチリア遠征が決定

されたあとの議論のなか、ニキアスからの非難に反論するべく言及されたものである。

この戦車競技と典礼に関して、Harrisが非常に優れた論考を提出している¹⁰⁾。議会弁論における慣習や暗黙のプロトコルをふまえた際に^{*17}、共同体ではなく自分自身の先祖について、また自分の公共奉仕の様について、ましてオリュンピア競技大会での優勝に言及する者はいない。議会における発言内容として、個人的な先祖や典礼に言及することは通常避けられ、アルキビアデスがこうした言動を見せるのは、明らかに慣習や伝統への反抗である。そしてこの不文律を破る演説を意図的に報告することで、トゥキュディデスはそれが彼の性格の一面であることを描写しているとHarrisは指摘する。

では、イソクラテスの『競技戦車の四頭馬について』もトゥキュディデスのような意図を持って、つまり見せかけの賛美の裏で、暗にアルキビアデスの行き過ぎた性格を描写していると捉えるべきだろうか。裁判員がこの演説を耳にしたとき（あるいは作品を読んだとき）、アルキビアデスへの心象はいかなるものだろうか。

特に注目すべきは、アルキビアデスのアテナイというポリスに対する忠誠心について（5-21）、また民主主義という国政に対する忠誠に焦点が当てられていることである（26-31）。またこの弁論がおそらく前397/396年頃とされていることも大いに考慮すべき問題となる¹¹⁾。すなわち、この弁論は恐るべき三十人政権を経験したあとの演説である。ポリスへの忠誠心と民主政への賛同とが必ずしも一致しない時期を経て、寡頭派と組むことなく、民主政を裏切るよりも追放されることを選んだと強調されることには（36）、三十人政権の過激派カリクレスの義兄弟であるテシアスの政治的動向との比較において優れた戦略となる（42-45）。

裁判員は公共奉仕を通してアルキビアデスの民主政アテナイへの忠誠を認め、またアルキビアデスの称賛を通じて訴訟人への不信に気づかされる。この作品に表れるアルキビアデス賛美の要素は、イソクラテスの法廷弁論における戦略として扱われているのである。

結論

イソクラテスがブシリスを取り上げて賛辞と弁明のあるべき形式について説明しようというときに、ソクラテスに不利益を与えるものとしてアルキビアデスに言及してしまえば、ポリュクラテスの『ソク

ラテスの告発』は正しいものだったということになる。告発として正しいのであれば、イソクラテスがこの作品とポリュクラテスに言及する理由も不明になる。あるいは『ソクラテスの告発』やアルキビアデスへの言及を避け、『ブシリスの弁明』だけを取り上げることもできた。それに関わらず、イソクラテスが自身の作品の質を疑われることにも気づかず、迂闊にアルキビアデスにふれたとは考えにくい。アルキビアデスがアテナイ市民から満場一致で称賛される人物でないことは、イソクラテスの『エウアゴラス』からも示唆される。

しかし、どのような評判の人物であれ、イソクラテスは称賛の文脈で否定的意見にあえてふれるよりも、そうした悪評を隠してしまうことを選んでいる。一方で弁明においては、称賛で得た要素を用いて、誹りを取り除くために必要な論証をおこなっている。アルキビアデスの称賛と弁明は、『競技戦車の四頭馬について』にも発揮されているとおりである。

繰り返しになるが、宣言した形式にそぐわない構成になっている弁論に対して、イソクラテスは異議を唱えている。イソクラテスにとっての称賛は、たとえば出自の高貴さや称賛にふさわしい事柄や功績を挙げることである。弁明をおこなう場合には、すでに被っている中傷や悪評について、たとえば関係者や事件の年代の考証から相手の立論の虚偽を示し、また人物像などの要素に基づく推論によって汚名をすすぐのである。イソクラテスが重視する賛美と弁明の区別は、このようなものであった。

イソクラテスは適切な修辭の原則に従ってブシリスを扱うことで、ポリュクラテスの『ブシリスの弁明』が持つパラドクスの性格を一切奪っている。ポリュクラテスは、ブシリスが非難されて然るべき人物であり、弁護しようがない人物だと一般に認められていると考えるからこそ、自らの力量を示すためにこの主題で弁舌を披露するのである。刑死したソクラテスは、むしろ称賛すべき人物であるというアテナイ人の反省があるからこそ、あえて告発することが挑戦的な試みになる。ゴルギアスも好んだこのような手法に対抗するには、パラドクスに力を与えているドクサ自体に挑戦しなくてはならない。

そこでイソクラテスが実践した賛美は、アルキビアデスの卓越性によってソクラテスの徳を保証したように、エジプトの卓越性や高貴な生まれによってブシリスの徳を保証することである。また弁明では、ブシリスが殺人とは程遠い人物であると認識させる情報を提供し、殺人と関連づけられる退治が実

現しないことを示す証拠によって、そもそも中傷は根拠も蓋然性もなく、この思い込み自体に欠陥があることを明らかにしているのである。これらの証明は、形式に応じた構成と適切な要素の利用に従ってこそ導かれるものである。もしも賛美の文脈においてアルキビアデスへの非難に対する弁明に意識をとらわれてしまえば、その演説がどのような場で発表されるものであるかという形式への理解が不足している、つまりイソクラテスがまさに批判するところのポリュクラテスと同じ過誤に陥っているということになる。

賛美と弁明を徹底して区別すること、とりわけ『ブシリス』において賛美の趣旨を見失うことを防ぐためのしるしが、アルキビアデスなのである。

【注】

- 1 本邦では1984年に廣川氏によって『イソクラテスの修辞学校—西欧的教養の源泉』が出版されている。本書は1980年出版の『プラトンの学園—アカデメイア』の姉妹編として企画されたもので、ヨーロッパにおけるイソクラテスへの理解を紹介した概説書の性格が強く、Marrouに負うところが大きい。またプラトンとの対立関係の記述が色濃い。cf. 廣川洋一：イソクラテスの修辞学校—西欧的教養の源泉，講談社；Marrouは修辞学の発展におけるイソクラテスの重要性を認めてこそいるが、あらゆる点においてイソクラテスをプラトンと同等に扱うことができないと認識を示している。cf. H. I. Marrou (1965): *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris, 1956.; またSeck (1976) が取り上げた研究論文の数々に見られるように、イソクラテスの作品ごとの注目度には大きな差がある。cf. F. Seck (eds.): *Isocrates*, Darmstadt, 1976.; イソクラテス的な修辞の実体を明らかにすることが今後も待たれる状況にある。
- 2 Isoc. *Bus.* 4-9.
- 3 上野はLivingstone⁴⁾ の解説に依拠しつつ、ポリュクラテスがソクラテスを中傷する目的での主張の根拠としてソクラテスとアルキビアデスを師弟関係としたのは事実誤認であり、またイソクラテスがアルキビアデスを高名な人物とするのも一般の認識からいって誤りであり、この矛盾の解決が困難であることを示している。cf. 上野慎也：逆しまに読む倒錯イソクラテス『ブシーリス』，共立女子大学文芸学部紀要，65：1-14, 2019.
- 4 逆説の証明によって自身の言論能力を証明、誇示しようとする動きは、ゴルギアス『ヘレネ頌』や『ないについて』が代表的であろう。またプラトン『パイドロス』で言及されるリュシアスの「自分を愛してくれる者よりも、自分を愛してくれない者を慕うほうがよい」という演説の内容は、これがリュシアスの真作でないとしても、演説における逆説の流行が垣間見える。イソクラテスはこうした流行に対して、自身の『ヘレネ頌』8-13節において批判している。
- 5 そのほか、蜂や塩、乞食や亡命者の称賛といった、些細なものやパラドクスを扱った作品をポリュクラテスに帰属させる動きもある。Quint. *Inst.* II.17.4; Demetr. *Eloq.* 120; Isoc.: *Helen* 8, 12; Pl.: *Symp.* 177b; Arist. *Rh.* 1401b24.; cf. Livingstone⁴⁾.
- 6 エジプトの伝説上の王ブシリスについては、少なくとも前6世紀には知られていたようで、彼がヘラクレスを食べようとする壺絵が残っている。cf. Papillon⁹⁾; Livingstone⁴⁾; Stephens⁷⁾; 一方で、ヘロドトスはこの伝説に言及して、「愚かしい」「無知」と一蹴しているcf. Hdt. 2.45.
- 7 『ソフィストたちを駁す』『パネギュリクス』『ヘレネ頌』など。cf. T.L. Papillon: Isocrates: Worthington, I. (eds.), *A Companion to Greek Rhetoric*, Oxford, 2007, 58-74.
- 8 Isoc. *Hel.* 14-15.
- 9 Gorg. *Hel.* 2
- 10 諸言のあとに系譜を置くことは、『アレクサンドロスへ贈る弁論術』にも見られる。*Rh. Al.* 1440b24.
- 11 これとよく似た論法が、プラトン『饗宴』におけるアガトンのエロス賛美に見られる。Pl. *Symp.* 197c.
- 12 アリストテレス『弁論術』は、称賛と非難は一つの性質の受け取り方や表現方法の異なりと見なしている (*Rh.* 1367b37)。しかしイソクラテスの場合、ブシリスにまつわる悪評を肯定的に言い換えるようなことはせず、そうした中傷的な言説は取り上げない。両者の賛美と非難には隔たりがある。
- 13 『フィリッポスに与う』の58-61節において、フィリッポスとの比較のために言及される。ここではアルキビアデスを評価が分かれる人物であると認めているが、68節ではアルキビアデス

(および同時に言及されたコノン、ディオニュシオス、キュロスら)を傑出した人物として讃えている。フィリッポスに自身の価値を示すためには、これらの人物が結果的に優れているという前提が必要である。『パンアテナイア祭演説』におけるアガメムノン、『アンティドシス』におけるティモテウス、『エウアゴラス』におけるコノン。賛美対象の人物をより高めるために、他の優れた人物を取り上げて脱線することもしばしば見られる。cf. 注7同書。

- 14 この作品は冒頭にあるはずの事件の陳述や証言が欠落している。そのため、この時すでに亡くなっているアルキビアデスへの称賛演説の様相を見せている。訴訟の手続きの種別や、実際に裁判で使用されたかなど、はっきりとしない点が多い作品である。訴訟の相手の名前についても問題があるが、本稿では便宜的に作品内で使用されている通り「テイシアス」と呼ぶ(1, 3, 45, 50節)。43-45節では三十人政権下での評議会議員であったと紹介されている。テイシマコスの子で将軍経験もあるテイシアスと同一視するのが有力である。cf. Whitehead¹⁾。
- 15 訴訟当事者が自分の父に関する弁明をおこなう例はアンティポン『ヘロデス殺害』に先例がある。Antiph. 5.74-80。
- 16 Thuc. 6.16。
- 17 ミュティレネをめぐるクレオンとディオドトスの論争においても、両者が審議における弁論のスタイルに対して批判しあっている。審議をおこなう場で、法廷弁論に見られる戦略を用いるクレオンが非難されている。cf. E. Harris: How to Address the Athenian Assembly: Rhetoric and Political Tactics in the Debate About Mytilene. *CQ*, 63: 94-109, 2013。

引用文献

1. D. Whitehead: *Isokrates: The Forensic Speeches (Nos. 16-21): Introduction, Text, Translation and Commentary*, Cambridge, 2022。
2. Y. L. Too: *The rhetoric of identity in Isocrates: text, power, pedagogy*, Cambridge, 1995。
3. L. Viidebaum: *Creating the Ancient Rhetorical Tradition*, Cambridge, 2021。
4. N. Livingstone: *A Commentary on Isocrates' Busiris*, Leiden, 2001。
5. 底本として、G. Mathieu, E. Bremond (eds.):

Isocrate, Discours, Tome 1, Les Belles Lettres, Paris. を使用する。

6. 特に断りのない限り、『ブシリシ』は拙訳を使用するが、L. Van Hook, (eds.): *Isocrates, Volume 3*, MA: Harvard, Cambridge, 1945.を参考にした。
7. S. Stephens: *Plato's Egyptian Republic*: I. Rutherford (eds.), *Greco-Egyptian Interactions, Literature, Translation, and Culture, 500 BC-AD 300*, Oxford, 2016, 41-60.: 40-41。
8. J. Bons: *Gorgias the Sophist and Early Greek Rhetoric*: Worthington, I. (eds.), *A Companion to Greek Rhetoric*, Oxford, 2007, 37-46。
9. T. L. Papillon: *Rhetoric, Art and Myth: Isocrates and Busiris*: C. Wooten (eds.), *The Orator in Action and Theory in Greece and Rome*, Leiden, 2001, 73-96。
10. E. Harris: *Alcibiades, the Ancestors, Liturgies, and the Etiquette of Addressing the Athenian Assembly: The Art of History: Literary Perspectives on Greek and Roman Historiography*, V. Liotsakis, S. Farrington (eds.), Berlin, 2016, 145-156。

参考文献

- E. Alexiou: *Isokrates De bigis und die Entwicklung des Prosa-Enkomions*. *Hermes*, 139: 316-336, 2011。
- 小池澄夫訳：イソクラテス弁論集，京都大学学術出版会，1998-2002。
- 納富信留：ソフィストとは誰か？，筑摩書房，2015。